

男性単數位格語尾 -y について

千葉 萌 一 郎

О форме местного падежа единственного числа на -y(-ю) в именах существительных мужского рода.

Хоитиро, Ти́а

共通スラブ語期に発達した名詞曲用の多様性は、ある意味ではこれ等の統合の一般的傾向を強めた。古いタイプの曲用が崩壊し、代って性による新しい統合が進行していた時、古代スラブ語文献が現れた。すでに古代スラブ語の文献には、異なる曲用タイプの男性名詞、中性名詞が、次第に $-\tilde{O}/-j\tilde{O}$ 語幹に滲透して行く過程が認められる。

性による種々の曲用タイプの統合は、単に他の語幹の異なる語のみならず、これ等の語尾の $-\tilde{O}/-j\tilde{O}$ 語幹への滲透を伴った。多くの場合同一の語中に、語幹を異にした語尾の平行的使用が生じ、それと共にこれ等の格形態に機能分化の傾向が認められた。

$-\tilde{U}$ 語幹男性名詞の大多数が、 $-\tilde{O}$ 語幹曲用に滲透して行った。その結果の一つとしての男性名詞単數位格語尾 -y について、前稿の単数生格語尾 -y に引続き考察を試みたいと思う。

もっとも $\tilde{O}/-j\tilde{O}$ 語幹単數位格語尾は -i であったが、先行の語幹母音と結合して二重母音を形成して、やがて単母音に移った。

*plodo-i > *plodoi > плодъ
*konjo-i > *konjoi > *konjei > кони
*selo-i > *seloi > сельъ
*poljo-i > *poljoi > *poljei > поли

これに反し \tilde{U} 語幹単數位格は語尾をもたず、位格語尾として受取られているのは古い語幹末母音であった。

*synou > сыноу

古代スラブ語 сыноу に、ゴート語 sunau, サンスクリット sūnau が対応する。

А.А. Шахматов は、位格 -y について次のような見解を述べている。

$-\tilde{U}$ 語幹から $-\tilde{O}$ 語幹への語尾 -y の拡大に力のあったのは、単数生格において語尾 -a の代りに -y が出現したことであって、単数生格語尾 -y が活動体名詞に関わりがなかったように、位格語尾 -y が殆んど活動体名詞に滲透することのなかったのはこの事実による。しかし、新しい語尾が定着するためには、更に別の条件が必要とされる。その一つとして、後口蓋子音語幹 г, к, х が、単數位格語尾 -ъ の直前で夫々 з, ц, с に変化したことをあげている。в песку, в полку の形態は、古い形態 в песць, в полць よりも容易に他の格と連合することができた。それに、複数主格 песци, полци は、早くからその形態を пескы, полкы に譲っていたので、語幹子音 ц は、後口蓋子音語幹の他の格には存在していなかった。この事実は、後口蓋子音語幹における古い形態、位格語尾 -ъ を、新しい形態 -y によって駆逐することを促進した。しかしながら、з, ц, с が、文法的類推により曲用、屈折において後口蓋音に組織

的に交替した大ロシア語方言においては、再び（一部方言的に）в песке, в полке の形態が生じて、в песку, в полку を圧迫した、としている。

確かに、на торзѣ, на отроцѣ, в дусѣ, на порозѣ に見られるような位格の形態は、単数のすべての他の格の形態より孤立し、合理性を欠いた存在であったろう。ところが語尾 -y の存在は、後口蓋子音語幹の変化を招ねかなかったので、この点では便利であったに違いない。同一の事実、後口蓋子音語幹の女性名詞単数与格、及び位格において生じている。ここでは二重母音起原の ъ の同様の影響のもとで、зі, ці, сѣ (нозѣ, рунѣ, снозѣ) の結合が生じたが、それ等はすべて他の格の語幹からの類推により、ге, ке, хе (негѣ, рукѣ, снохѣ) に交替して、次第に消滅して行った。この事実、-Û 語幹から -Ō 語幹への位格語尾 -y の滲透に、深い関わりをもっていることを示している。

更に、А.А. Шахматов は、第2の条件として移動アクセントをあげている。

移動アクセントをもった語幹において位格 -y は、アクセントをこの -y にもっていた。移動アクセントをもった古来の -Û 語幹においては（我々に知られている -Û 語幹の大部分が移動アクセントをもっていた）、語幹にアクセントを保持する他の格の多くとは異なり、単數位格は語尾にアクセントをもっていた（生格 дѡму, 造格 дѡмѣмь, 前置格 домѣ）。それはリトワニヤ・スラブ語期に、単數位格語尾 -y は、先行する短音節、あるいは異なる種類の長さをもった音節からアクセントを、語尾に引き寄せ得たある種の長さをもっていたことに起因する。このようにして、移動アクセントをもった語における、単數位格の新しい形態 -y のアクセントは、移動アクセントをもった語において、常に語根にアクセントをもっていた単數位格の古い形態 -ѡ のアクセントとは異なっていた。以上の状況は、移動アクセントをもった語に、-y の確立を促進した。何故なら位格の両形——古い -ѡ と新しい -y——は、単に語尾のみならずアクセントによっても異なり、これ等の二重の相違によって統辞的性格をおびたところの、異なった形態連合をとるにいたった、としている。

С.П. Обнорский も又 -Û 語幹の影響は、アクセントの契機を考慮に入れて、生格ならびに位格の形態に同時に滲透したと考えている。

-Û 語幹語尾 -y の -Ō 語幹位格への滲透は、最初 -Û 語幹名詞の性格に従って、弱母音の脱落により1音節化した2音節名詞に拡がって行く、в торгу, в стогу. しかしながら、その後は1音節以上の名詞に拡大の道を辿り、при народу, по приезде, в сапогу, 更に、接尾辞 -ск- をもった地名にまで及んだ、в Минску, в Смоленску. -Û 語幹生格、位格の -y 形態の拡大は、その直接の契機として移動アクセントに関わりをもっていた。それは適当なアクセント条件において、語幹から位格語尾にアクセントが移動することであった。この過程を辿ったのは、専ら不活動体名詞であった。これにより、-Û 語幹活動体名詞は早くから、-Ō 語幹語尾を得ていた、сынѣ. 最後に、語尾 -y の滲透は、初期の段階には男性名詞にのみ可能であった、としている。

男性名詞位格語尾 -y が、不活動体名詞を占めていることについては、前述の通り А.А. Шахматов は、生格語尾 -y との関連において捉えているが、この点について Л.А. Булаховский は、第一に、活動体名詞において前置格は、機能的に位格に近い意味では殆んど使用されないこと、第二には、生物に関係する -Û 語幹名詞中二つの語、сынѣ, волѣ は、位格の新しい形態が形成される傾向が現れる以前に、-Ō 語幹名詞の影響を蒙り、このようなタイプの新しい形態のためのモデルとして役立つことはできなかった、と述べている。

一般的には、前置詞 въ, на との結合においては -y 形態が優勢であり、前置詞 о, при との

結合においては -b 形態が優勢である。-y 形態が使用されるのは名詞に定語が先行していない時で、これとは反対に -b 形態はこの条件が存在する時である。A. A. Шахматов は、ここでも古代ロシア語、現代ロシア語、現代白ロシア語、現代ウクライナ語から夥たしい例をあげているが、古代ロシア語、現代ロシア語の若干の例にとどめることにする。

1. 古代ロシア語における単數位格語尾 -y. 前置詞 въ, на に続く場合。

(a) 後口蓋子音語幹。

на беломъ пѣску, на островку, въ кабалномъ долгу, на снѣгу, в возку, въ иску, въ списку, въ починку, въ Можайску, въ переулку.

(б) 移動アクセント語幹。通常位格の直前に定語が存在しない場合。

на бору, на низу, на носу, в миру, в горну, на холму, въ дому своемъ, на часу, на дару, на Доноу, на ледоу, на мѣстци и часоу.

(в) 定語があっても -y 形態をとる場合。

в Максимовѣ жару, въ Берестовѣ стану, въ моемъ роду, в томъ миру, во мницѣкомъ чину, на томъ сниму, на семъ листу.

2. 現代ロシア語における単數位格語尾 -y. 前置詞 в, на に続く場合。

(a) 固定アクセントをもった後口蓋子音語幹。

на чердаку, в рынку, на волоску, на потолку, на лужку, в цветнику, в сапогу, в цветку, в чайнику, в садочку, на шестикку, на большаку, в песку.

(б) 後口蓋子音語幹を含む移動アクセント語幹, 通常位格の直前に定語が存在しない場合。

в саду, на полу, на берегу, на листу, на волосу, на глазу, на ветру, в мозгу, в неводу, на дому, у шару, в илу, в гараду, впереду, в боку.

更に A. A. Шахматов は、語尾 -y の方言的伝播の例として (a) 固定アクセントをもった語, на сосуну, в огню, в хлеву, на каню, на кастылю, на хрясту, в углу, в овсу, 活動体, на ворю. (б) 前置詞 при, о, の直後, при отцу, при стуку, при брату, об рублю, при вечеру. (в) 1 音節の語, во рту, на лбу, на пню をあげて、これ等の現象は方言を含めての大ロシア語期に関わりをもつ、かなり遅い時期に生じたと見ている。

ところがこれ等の一般的傾向に対して П. Я. Черных は次のように述べている。

単数前置格 -y/-ю の形態は多くの方言において、しかもモスクワにおいても古代から、単に前置詞 въ, на の後のみならず、他の前置詞の後でも使用されていた。又それは、単数前置格において、語幹から語尾 -y/-ю に移る移動アクセントが、単数語幹にある場合にだけ使用されていた訳でもなかった。語尾 -y/-ю のアクセントは、必ずしも必要とされなかった。1649年の古代モスクワ法典に、次のように認められる。

бить челом о сыску, о долгу тяглых людей, о корму, о третейском суду, о недельщиковѣ ъзду, приставить в грабежу, в котором году, в осадном списку, в Рыльску, в Серпѣйску.

従って、標準語における単数前置格 -y/-ю の形態使用の現代的法則は、モスクワにおいてはこの時期より遅れて確立された、としている。

ところで位格語尾 -e(<b), -y の平行的使用例は、XVI 世紀の文献にもよく反映されている。《Домострой》においては、語尾 -y は、1 音節で不活動体名詞が前置詞 в (多い) 及び на (少ない) と共にある時に現れている。

в году, в долгу, в дому, в квасу, в леду, на леду, в соку, в стогу.

但し、2個所で語尾 -y が前置詞 o と共に使用されている。

не печется о дому мужь еа, молится о своемъ согрешен'и... о стльскомъ и щенниче-
скомъ чину.

およそ XVI 世紀のこの頃には、すでに夫々の語尾の使用の可能性が、それ等を巧みに、時としては文体的に利用されていると考えられるふしがある。それは《Домострой》の中で、高い調子の文体で書かれている《Похвала женамъ》の章に、次のように読まれる。

и лёта своа исполняютъ во блазѣ мирѣ.

然るに他の個所では、位格の異なる形態が使用されている。

а жена пьяна в миру не пригоже.

生きた話し言葉の形態である в миру は、初めにあげた文中では不似合いであったに違いない。何故なら、この章の文体の調子が損われたであろうから。

現代ロシア語の標準語においては、男性名詞位格の形態は -Ō 語幹語尾 -b に遡る -e と、-Ū 語幹語尾に属する -y との二つの形態が可能である。しかしながら南方方言においては、語尾 -y が一層広く用いられている。そこでは類推のもとに、活動体名詞のみならず固定アクセントをもった名詞からも作られている。

на вару шапка гарить, спорють абь там эдураку, при атцу.

更に過程の拡大の結果、語尾 -y は多音節名詞にも滲透するにいたった。のみならずこの語尾は中性名詞にも滲通した。

на акну, на сялу, во полюшку, во полк.

この拡大は特に南方方言地帯に著しかった。

語尾 -e は基本的、首導的であり、任意の名詞にとって可能であるが、語尾 -y は基本的には移動アクセントをもった1音節の男性不活動体名詞に定着し、前置詞 в, на と共に場所を意味する結合において使用される、в глазу, во лбу, на дому, на носу, 又、固有名詞においても見かけられる、в Крыму, в Клину, на Дону. 前置詞 о, 又は при との結合においては語尾 -e が使用される、о глазе, о носе, при саде. (但し, при полку)。両形態の基本的な相違は、同一の前置詞との結合において語尾 -y は状況語としての意味をもち、語尾 -e は補語としての意味をもつことであろう。

знает толк в лесе. (補語)。

растет в лесу. (状況語)。

разбирается в чае. (補語)。

чайники в чаю. (状況語)。

играет главную роль в «Лесе» Островского, в «Вишневом саде» Чехова. (補語)。

грибы в лесу, цветы в саду. (状況語)。

語尾 -y のもつ状況語的意味は、次のように大別される。

1. 場所の意味。

в лесу, в углу, в порту, на берегу, на снегу, на полу, на краю.

2. 時間の意味。

в прошлом году, в пятом часу, на своем веку.

3. 動作の動態の意味。

на ходу, на лету, на боку.

その他合成述語においては、状態の意味をもつ。

больной в бреду, липы в цвету.

語尾 -y は、名詞の語義により別の意味をもつ。人のある数量を意味する場合である。

на миру, в полку, в строю.

又、1音節のある物質名詞は語尾 -y をもつ。

паркет на клею, пряники на меду, весь в снегу, весь в жиру, гриб во мху, куртка на меху.

通常、語尾 -y をもつ多くの名詞が定語をもつ場合には、語尾 -e をとる。

весь в снегу — в пушистом снеге.

на краю, на самом краю — на переднем крае.

вариться в соку, в собственном соку — в виноградном соке.

二つの形態が同一の意味をもつことがある。

сидит ворон на дубу — золотая цепь на дубе том.

в стогу — в стогe.

в спирту — в спирте.

на холоду — на холоде.

この場合両形態の文体的相違が認められ、語尾 -y は主として話し言葉としての性格を、語尾 -e は文語的性格をもつ。

в цеху — в цехе.

в отпуску — в отпуске.

в дому — в доме.

в аэропорту — в аэропорте.

в чаю — в чае.

на мысу — на мысе.

в соку — в соке.

в хлеву — в хлеве.

в квасу — в квасе.

на крюку — на крюке.

XIX 世紀の文学作品に、方言の影響のもとに現れていた на волоску, в песку, на суду, в чину, в шуму, на острове, на холму, в клеверу, в квасу は姿を消した。又、XIX 世紀においては標準的な на бале, на берегу, в лесе, в саде は、夫々 на балу, на берегу, в лесу, в саду に交替した。

参 考 文 献

АН СССР. Ин-т русского языка. Грамматика русского языка. Т. 1. М., Изд-во АН СССР, 1960.

Беседина-Невзорова В.П. Старославянский язык. Харьков, Изд-во ХГУ, 1962.

Борковский В.И. и Кузнецов П.С. Историческая грамматика русского языка. М., Изд-во АН СССР, 1963.

Булаховский Л.А. Исторический комментарий к русскому литературному языку. Киев, "Радянська школа", 1958.

- Добромыслов В. А. и Розенталь Д. Э. Трудные вопросы грамматики и правописания. Вып. 2-й. М., Учпедгиз, 1960.
- Розенталь Д. Э. (ред.) Современный русский язык. М., Изд-во МГУ, 1971.
- Соколова М. А. Очерки по исторической грамматике русского языка. Л., Изд-во ЛГУ, 1962.
- Черных П. Я. Историческая грамматика русского языка. М., Учпедгиз, 1954.
- Шахматов А. А. Историческая морфология русского языка. М., Учпедгиз, 1957.